俳句同好会

世話人　星野　紫杏

昭和六十一年九月に第一回俳句同好会を発足して以来、九年の間に吟行を包め、五十七回の句会を持つことが出来ました。発足以来ずっと久保白楊さんの御指導で回を重ねて参りました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。お偉い特別な先生を部外からお招きするのではなく、あくまで互選で選出した句を、皆で推敲し磨をかけると云う方針を貫いて参りました。今后もこの方向で続けて行き度いと思っています。

第五十六回　平成六年九月十三日(火)
兼題「蟬」「簾」「甲虫」「さくらんぼ」「花火」と当季雑詠
吟行　東寺境内
句座　割烹「美登利」

兼題句

座椅子より　寝袴子に換える　夜長かな　生雄
夢の中　へちま搾りし　子槻忌かな　生雄
弁当に　一粒入れる　さくらんぼ　信子
梅桃(ゆすら)の実　唇そめし　里の味　治吉
あの辺り　吾が座にし度し　星月夜　生雄
野仏の　乾きしまゝに　秋暑し　紫杏
油蟬　待つバス停に　日陰なく　生雄
送り火の　揺れ瞬は　別れかな　生雄
つくづくと　何欲しがるや　法師蟬　白楊
簾越しに　湧き立つ雲の　眩しかり　白楊

吟行句

秋空と　五重の塔の　見える句座　陵南
残暑すぎ　菩薩も如来も　くつろげり　陵南
黝(くろず)める　大塔時に　秋光す　景流
見上ぐれば　東寺の塔と　秋の雲　陵南
大らかに　風鐸揺るる　夏の塔　白楊
東寺来て　十界を知る　初秋かな　陵南

第五十七回　平成六年十月十二日(水)
兼題「秋晴れ」「菊」「蓑虫」「柿」「茸」と当季雑詠
吟行　建仁寺境内と方丈
句座　レストラン「菊水」

兼題

残されて　それぞれの菊　乱れ咲き　治吉
はみ出たる　舞茸らしき　苞一つ　白楊
下りかけ　風に蓑虫　思案せり　生雄
煙茸　孤茸みな　蹴られたり　白楊
吊るされて　無人売場の　柿の枝　生雄
菊の香を　まといて辞する　葬の列　紫杏
睡蓮も　葉のみ浮べて　秋しづか　紫杏
秋晴や　気球いくつも　動かざる　白楊

喜雨ありて　しづまりかえる　萩の寺　陵南
段々の　畑に段々　彼岸花　信子
破れたる　役者絵うちわ　捨てもせず　生雄
豊作に　膨らむサイロ　村祭り　紫杏

吟行句

落葉焚く　煙は法堂(はっとう)　つゝみけり　白楊
廊きしむ　風神雷神　秋の雨　生雄
建仁寺　台風余波に　雲速し　紫杏

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四朗
㈱デリブ　林　治吉
光星電工㈱　久保　白楊
㈱淀電気水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
日本システム工業㈱　三井喜代治
洛南電気工業㈱　原田　恕
堀電気工事㈱　堀　信子
㈱トモエ屋　星野　紫杏

俳句同好会

世話人　星野紫杏

昨年の十月十二日（水）に建仁寺吟行の第五十七回例会を区切に、小生の入院やその他の理由で、約半年間の中断がありましたことを世話人として、深くお詫び申し上げます。今回から下里尚信様が新に御参加頂きました。

第五十八回　平成7年5月二十九日（月）
兼題　十一月「鷹」「七五三」「かえり花」「山茶花」
兼題　一　月　年末年始に関りある事象
兼題　五　月　当季雑詠
吟行　洛東「銀閣寺」境内
句座　割烹「もん吉」

兼題句

春近し　脈とる看護婦　薄化粧　紫杏
蹴り返へす　毬が紅葉を　散らしけり　信子
贈られし　梅一枝の　出窓かな　紫杏
石垣の　高きに揺る　大手毬　信子
つけの梛　白髪からまる　そゞろ寒　生雄
初午や　巫女足迅やに　丹塗廊　紫杏
冬陽蹴る　ラガー校庭　突走る　景流

嵯峨「天龍寺」にて

木陰には　猫半眼の　薄暑かな　紫杏
山開き　法螺渺々と　谷渡る　白楊
残雪も　消えて裾野に　水芭蕉　陵南
方丈を　安居の僧の　急ぎおり　義一
名水を　汲めば結界　著莪の花　紫杏
白ひ来る　梔子灯には　外れたる　白楊

祇王寺の逝く秋惜しむ　人の列　陵南
母の日に　届きし前掛　して厨　信子
山茶花の　道行く程に　友に逢ふ　景流
枯れ萩や　鋭く切られ　鎌の痕　生雄

吟行句

誰が墓ぞ　卯の花腐し　お茶井そば　白楊
目の下に　けぶる銀閣　初夏の雨　紫杏
ねかるめる　銀閣寺通　若葉雨　景流
銀閣の　巡りたき道　止めつゝじ　白楊
銀閣の　緑を分かつ　銀沙灘　尚信

第五十九回　平成七年七月四日（火）
兼題　「くちなし」「海開き」「山開き」
　　「初蝉」当季雑詠
吟行　嵯峨「天龍寺」
句座　「林」邸

兼題句

山開きと　兼題を得し　今日も雨　尚信
くちなしの　花静かなり　法の庭　義一
梅天に　白山見えず　国境　陵南
梔子の　花暁の闇　ほどきをり　白楊
初空蝉　見つゝ初蝉　聞きにけり　白楊

吟行句

大方丈　風吹き抜かせ　緑濃き　白楊
曹源池　梅雨空に鯉　憩いけり　尚信
嵐山　森羅萬象　梅雨さなか　紫杏
梅雨しきり　おたべ人形　眠たけに　景流
しとみ戸を　はねし霊廟　梅雨じめる　紫杏
伏虎石　梅雨にうたれて　動かざる　景流
連子窓　通して見える　紫陽花　陵南
紫陽花や　大雨に耐えて　藍深し　陵南
方丈は　借景緑　濃き淡き　紫杏
梅雨じめる　南朝悲し　多宝殿　陵南
それぞれに　傾き梅雨の　蓮葉かな　白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業(株)　栩谷　四朗
(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
(株)淀電気水道工業所　田中　生雄
(株)オリヂナル電設　石崎　陵南
(株)トーエネック　新谷　景流
日本システム工業(株)　三井喜代治
洛南電気工業(株)　原田　恕
堀電気工事(株)　堀　信子
(株)トモエ屋　星野　紫杏
川鉄電設(株)　下里　尚信

ゲスト参加
職別国保　三木　義一

俳句同好会

世話人 星野紫杏

俳句同好会も回を重ね、平成七年九月十三日（水）の詩仙堂吟行にて六十回となりました。私達京都を中心に住んで居りながら、京都の史跡名勝にも未知の処が多く、毎回御参加の方々より好評を戴いています。これからも吟行を中心に俳句同好会を進めて参りたいと考えています。

第六十回 平成七年九月十三日（水）
兼題 「祇園祭」「大文字」「天の川」「虫」
「枝豆」と当季雑詠
吟行 「一乗寺下り松」「詩仙堂」「金福寺」
句座 湯どうふ「豆花」

兼題句

枝豆の　土間に置かれて　残暑かな　治吉
鉾立師　代替りせつ　綱捌き　白楊
紅白に　草屋を覆う　百日紅　信子
墓仇の　庭に古りたつ　百日紅　一義
名水を　ながつ祠に　ちちろ鳴く　景流
虫の声　ありて文庫の　隅のぞく　信子
黒猫に　睨まれて佇つ　晩夏光　景流
寄り添いつ　流れつ満灯　原爆忌　生雄
五山みな　消えし夜道の　二十日月　白楊

吟行句

往く夏を　惜しむか西日　芭蕉庵　紫杏
説法は　法師蟬なり　金福寺　高信
秋風や　しきみ揚げたつ　芭蕉庵　白楊
静寂を　添水が破つ　詩仙堂　治吉
釣瓶おち　武蔵が京を　去りし道　一義
しじま裂く　添水入日を　近づけり　一義
行き止り　波切不動の　残り蟬　高信
一花　尾花に風の　ありにけり　白楊
竹の植　残暑に乾く　詩仙堂　紫杏
俳聖の　句碑読みづらし　晩夏光　景流
俳聖の　句碑に佇ずみ　晩夏ゆく　一義

誌仙堂にて

高台寺にて

第六十一回 平成七年十月二十七日（金）
兼題 「空高し」「夜寒」「菊」「新米」
「茸」と当季雑詠
吟行 「青蓮院」
句座 割烹「こかじ」

兼題句

作業衣の　固く乾きて　天高し　景流
空高く　筆太となつ　飛行雲　生雄
仏飯に　奉りけり　今年米　白楊
ひと蹴り　座布団寄せつ　夜寒かな　白楊
畑すみに　来ねし菊も　咲き初めし　信子
紙切も　迫つ句作や　蟋蟀の芸　生雄

吟行句

青不動　照らし出せり　秋灯　景流
大楠を　見けつ先の　空高し　紫杏
水茨の　一本仲びて　縁に触つ　白楊
留石も　隠して庭の　茨の花　生雄
東田山　社寺を抱きて　冬隣　景流
唐破風を　包む借景　高き空　高信

第六十二回 平成七年十一月二十九日（水）
兼題 「時雨」「落葉」「熱燗」
「鍋料理」「大根」と当季雑詠
吟行 「高台寺」
句座 そば処「力彌」

兼題句

軒ごとに　大根干して　過疎の里　生雄
時雨来て　新聞かぶし　軒ひらう　紫杏
乗り出して　肩みせてをり　大根畑　白楊
け時雨　五鈴大橋　渡つ間を　白楊
時雨虹　追うバスの旅　但馬路　陵南
山茶花の　こぼれし苔は　掃かずをく　白楊
山茶花の　垣根のうちに　閑静す　信子

吟行句

檜皮屋根　紅葉いくつか　置かれけり　白楊
高台寺　一株づつに　暮れつ秋　紫杏
時雨雲　夕陽一条　高台寺　高信
金色に　御霊屋照らす　秋入日　紫杏

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四郎
㈱デリブ　林　治吉
光星電工㈱　久保　白楊
㈱淀電気水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
日本システム工業㈱　三井喜代治
洛南電気工業㈱　原田　恕
堀電気工事㈱　堀　信子
㈱トモエ屋　星野　紫杏
川鉄電設㈱　下里　尚信
ゲスト参加
職別国保　三木　一義

俳句同好会　　世話人　星野紫杏

新しい年を迎え、第六十三回俳句同好会を一月二十六日に開催致しました。

兼題　年末、年始に関りあることと当季雑詠
吟行　『智積院境内』と『国宝障壁画』見学。
句座　茶寮『きくよう』

兼題句

棒鱈の　香とすれ違う　初詣　白楊
この一年　大過なき身を　みそかの湯　紫杏
末社にも　手を合わせける　初詣　信子
破魔弓を　忘れしまゝに　縄のれん　生雄
抱き上げて　福引孫に　引かせけり　生雄
和やかに　どんど焼く辻　笑声　信子
去年は去年　今年の景の　新しき　白楊
五十年　累代墓守る　寒椿　紫杏

吟行句

雪舞いて　仏足石の　ちぢこまり　陵南
そろり石　動くと見えし　寒真鯉　白楊
等伯の　四季の草花や　外は雪　尚信

第六十四回例会　平成八年三月十九日（火）

早春の洛西苔寺にて開催致しました。今年はいつまでも寒く厳しく当日は、梅もまだ二分咲きと言った所でした。

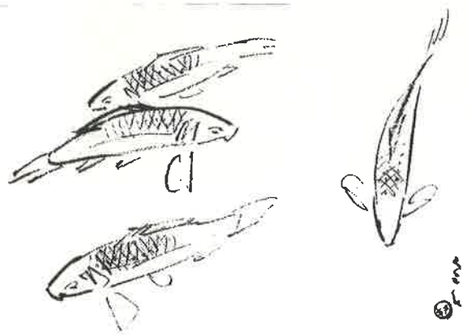
兼題　『雪解』『蜆』『木の芽』『雲雀』
吟行　『若布』と当季雑詠
句座　『苔寺』と『池大雅美術館』
林治吉郎にて

兼題句

山頂の　城をつゝみて　春霞　陵南
呀て返る　道に茶髪の　土工達　景流
あけ雲雀　漫ろ歩きの　土手長し　信子
おどり喰い　白魚の目に　愁あり　一義
恵のまゝに　競いて芽ぶくや　庭の木々　生雄
春浅し　至福の時を　墓に過ごす　景流
啓蟄に　新雪まだも　積もりけり　治吉
もの言わぬ　こども挨拶　枝垂梅　紫杏
瀬田こいし　手植の蜆　砂を吐き　生雄
振り洗う　灰より出でし　あお若布　白楊
春一番　別れの挨拶　かき消せり　紫杏

吟行句

無と空と　春まだ浅き　苔の寺　陵南
遠州が　配せし石か　春の雪　一義
そばえ来て　苔の膨む　西芳寺　白楊
紅梅を　背にしてしきる　今日の句座　紫杏
涅槃西風　無の字の多き　写経かな　一義
苔寺の　池のあじろに　春蜆　紫杏
落椿　苔のしとねに　ならびけり　尚信
春めける　根上り杉の　根にも苔　紫杏



俳句同好会　　世話人　星野紫杏

第六十五回例会　平成八年四月五日（金）

四月と言へば花を期待して、桜の名所へ吟行を致しましたが、今年はいつまでも寒い日が続き、蕾は固いと言う状況でした。

兼題　『朧』『長閑』『入学』『花』『蛙』
吟行　『大原野神社』と『花の寺』
句座　宝楽焼料理『ぶへい』

兼題句

遅霜や　句題が先に　季節とる　尚信
月朧　どこかで嬰の　声しきり　景流
並べ置く　喋長閑に　仰向ける　白楊
水辺に　目玉累なり　蝌蚪生る　生雄

吟行句

竹林の　奥の朱きは　藪椿　白楊
生かされて　花野に憩う　今日の幸　紫杏
菜の花や　陽を一杯の　大原野　景流
木洩れ陽の　斑を拾いつゝ　花の寺　白楊
早咲の　句座に決まりし　花の寺　生雄
花の寺　阿加井の水に　落椿　紫杏
西行の　鏡の石に　落椿　陵南

第六十六回例会　平成八年五月二十八日（火）

五月下旬の青葉の二条城へ吟行に参りました。晴天に恵まれ、団体旅行の客が多く城内の砂利道は大変な土埃でした。

兼題　『ダービー』『初鰹』『柏餅』『蟻』『薔薇』
句座　神泉園『平八』

兼題句

銘柄は　土佐の地酒に　初鰹　陵南
出眼鏡　地図の旅路を　蟻歩む　白楊

紅薔薇が　今盛りなる　空家かな　陵南
赤き薔薇　今年も初恋　思い出し　陵南
伏足石　筋そのまゝを　蟻の道　白楊
初鰹と　信じて旨き　たゝきかな　尚信
母病みて　小ぶりの薔薇は　反り咲けり　生雄
ダービーに　一喜一憂　大嗔声　生雄
作候か　蟻の一匹　飛石に　生雄
孫と分け合う　お供への　柏餅　生雄
そよ風に　立泳ぎせる　鯉のぼり　生雄

吟行句

緑湧き　花一つなし　二条城　尚信
水蓮の　影の切れ目の　緋鯉かな　白楊
城薄暑　廊下に裸足　心地よし　紫杏
乳鉢一つ　錆着し　城薄暑　白楊
梅雨晴る　木丸跡に　佇学生　陵南

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱	柳谷四郎
㈱デリブ	林　治吉
光星電工㈱	久保白楊
㈱淀電気水道工業所	田中生雄
㈱オリヂナル電設	石崎陵南
㈱トーエネック	新谷景流
日本システム工業㈱	三井喜代治
洛南電気工業㈱	原田　恕
堀電気工事㈱	堀　信子
㈱トモエ屋	星野紫杏
川鉄電設㈱	下里尚信
ゲスト参加	
職別国保	三木一義